

**卒論作成に向けたネット上の
ラーニング・コミュニティ
—SULMS フォーラム機能の活用—
経済学部 教授 岡本哲弥**

1. これまでの4回生ゼミの課題

専門演習Ⅲ・Ⅳは、卒業論文の作成を進める授業に位置付けられるが、例年、1回の授業で、3名程度の学生に進捗報告をさせて、ディスカッションする形式を取ってきた。しかし、当該演習においていくつかの課題も感じられた。

第1に、春学期の専門演習Ⅲは、就職活動の時期と重なるため、出席者が少なくなったり、報告者が急遽欠席となったり、予定通りに進まないことも多い。

第2に、ディスカッションが報告者と教員のやり取りのみになりがちである。本来は、全体で議論すべきであるが、報告者その他のゼミ生の意識差があり、なかなか難しい。

最後に、卒論執筆の目標や計画性の維持である。2万字の卒論を作成するには1年を通じて計画的に進めなければならないが、モチベーションを維持することが難しい。学部全体としての発表会や卒論集もないので、学生は目標を持ちにくいように思われる。また、卒論審査が副査制である大学もあるが、副査による評価によって、良い意味で学生の緊張感を持続できるのかもしれない。

2. コロナ下でのゼミ運営

令和2年度はコロナ禍で対面授業が大幅に制限されることとなった。またゼミ生は、留学生5名、復学者1名を含む計18名であった。留学生のうち2名は春休みに一時帰国後、母国から日本に再入国できない状況にあった。

こうした状況下では、オンライン授業に移行せざるを得ず、SULMSやZOOMを活用しながら、以下のプログラムでゼミ運営をすることにした。

【コロナ下のゼミ運営プログラム】

〈令和2年度春学期〉

- ZOOM: ガイダンス (4月20日)
- SULMS: 第1回報告資料 (期限6月1日)
➡ 18名相互コメント (期限6月8日)
- ZOOM: 全体ゼミ (6月15日)
- SULMS: 第2回報告資料 (期限7月13日)
➡ 9名相互コメント (期限7月20日)

〈令和2年度秋学期〉

- ZOOM: ガイダンス (10月5日)
- SULMS: 第3回報告資料 (期限10月26日)
➡ 3名相互コメント (期限11月2日)
- SULMS: 卒論ドラフト (期限: 12月1日)
- ZOOM: 全体ゼミ (12月1日)
- 対面: 卒論検討会 (12月14日)
➡ 2名相互コメント/ピア・レビュー

例年、学生ごとに半期に2回程度の進捗報告を課してきたことを踏襲し、その代替としてSULMSに卒論の進捗報告用のフォーラムを設定し、そこに進捗状況のファイルを提出させることにした。その提出期日から1週間では他のゼミ生の進捗報告にコメントするように指示した。但し、報告回数を重ねるに伴い、進捗ファイルのページ数も多くなり、コメントの負担が増すことに配慮し、第1回目は全員にコメントするようにしたが、第2回目は全体を2グループに分け、9名のグループ内でコメントを、第3回目では6グループで3名のグループ内でコメントを相互にするように促した。第4回目の発表は卒論検討会(12月14日)になるため、12月1日までに、フォーラムに卒論ドラフトを提出させ、合わせて卒論検討会のパートナーを決め、検討会当日のコメンテーターの役割とともに、パートナーの原稿の校正などのチェックも相互で行うこととした。また、検討会では各プレゼン(発表8分+質疑応答7分)に対して、SULMS

のフィードバック機能で「目的の明確さ」「結論の明確さ」「先行研究の十分さ」「論理展開の妥当性」「発表の分かり易さ」などについて全員でピア・レビューを行った。



写真 卒論検討会(2020年12月14日)の様子

3. ゼミの運営状況と成果

SULMS のフォーラムにより、ゼミ全体で卒論の進捗報告ファイルを共有し、その中で相互にコメントを投稿させるという取り組みを試みてきた。その結果、例年と比較しても遜色のない、いやむしろ全体としては水準の高い進捗報告資料やドラフトであったと感じられる。SULMS で自身の発表資料が全員にシェアされることを意識してなのか、時間を掛けて資料を作成することに繋がったものと思われる。

これまでのゼミ運営の第1の課題であるゼミへの参加と就職活動の両立について、ネットを活用したゼミ運営はその両立を容易にしたようだ。なぜならゼミによる時間拘束は、ZOOM によるゼミ開催日と卒論検討会日に限られたからである。

第2の課題として、ゼミ全体でのディスカッションに関して、SULMS のフォーラムで、他のゼミ生の報告資料へのコメントを義務付けたことにもよるが、良質なコメントが多くみられ、他の学生の資料にもきっちり目を通して、コメントしている様子が窺われる。対面でのゼミでは、とかく発表学生と教員間での質疑応答になりがちであった点がある程度解消されたように思われる。

最後の卒論の執筆を進めるうえでの目標や

計画性の維持という点に関連して、SULMS のフォーラムは卒論の進捗管理という面でも有効であったように考えられる。それは教員にとっての学生管理という点だけでなく、学生自身がフォーラムで他のメンバーの資料に目を通したり、コメントを考えたりする中で、自身の進捗状況がメンバーの中でどの位置にあるのかを認識していたのではないだろうか。

4. ラーニング・コミュニティとして

今回の取り組みは、私自身が積極的に授業改革を行おうとした訳ではなく、コロナ下で、2 で示したようなゼミ運営を余儀なくされた感が強い。そのことを鑑みれば、今回の取り組みを教育実践優秀賞に選考頂いたことは恐縮至極である。

教育実践優秀賞のテーマ「学生の授業時間外学習を促す授業改革の試み」に引き付けられれば、卒業論文は授業時間外学習を求められる最たる例であろう。学生自身の関心や問題意識に応じたテーマについて、授業時間にはあくまでも進捗状況の報告や意見交換にとどまり、自身で先行研究の検討、データの収集、分析、そして論文の執筆の時間を確保しなければならない。これまで、この困難な作業過程を学生個人の気力や努力にのみに任せるだけで良かったのだろうか。何らかのサポートを必要としていたのではないか。

今回、SULMS のフォーラムでの進捗報告の中で、しっかり卒論を作成しようという意識付けに繋がり、また他のゼミ生の資料にも真剣に目を通してコメントする過程で、他のゼミ生の良い点を学び、自身の卒論にも反映させている点もあったと思われる。そして18名全員がSULMS 中心のゼミで一人として挫折することなく卒論を書き上げてくれたことが、SULMS のフォーラムが学生同士相互に学び合うラーニング・コミュニティとして機能していたことの証であろう。